

NEWS RELEASE

平成 19 年 1 月 4 日

電通グループの次代の種を蒔こう
「グローバル」「ワンストップ」「ソーシャル」の三つの種を蒔き、育てる年に。
—電通新年仕事始式で俣木社長があいさつ—

株式会社電通（俣木盾夫社長）の平成 19 年仕事始式が、1 月 4 日午前 9 時 50 分から東京本社他で開催された。東京本社の仕事始式は汐留本社ビル 1 階電通ホールで行われ、俣木社長が年頭の所信を述べた。要旨は以下のとおり。



亥年には「万物が次世代の種となる」という意味があるそうだ。過去の亥年を振り返ると、1875 年は『東京日日新聞』に「ビール発売広告」が掲載され、この頃から「広告」という言葉が定着した。現在の天皇皇后両陛下ご成婚の 1959 年は、テレビ広告がラジオを抜いて新聞に次ぐ第二のマスメディアとなった年であった。1995 年は「ウィンドウズ 95」が発売され、今日のデジタル・メディア時代が始まった年と言える。

今年には電通グループも、次世代に向けて「新しい種」、特に「グローバル」「ワンストップ」「ソーシャル」という三つの種をより多く蒔き、日本経済の、そして電通グループのさらなる成長を確かなものにしたい。

「グローバル」の種という意味では、中国・インドなどの BRICs 市場はもちろん、欧米においても私たちはさらに前進しなくてはならない。グローバルに展開することは極めて難しいことであるが、電通グループはグローバルに挑戦し続けることで、世界に通用する力を養うことができると考える。多様なビジネスの中で培ってきた適応力や、専門性と統合力の強みを活かし、それぞれのローカルに根差した活動をグローバルに繋ぐことで、電通グループはさらに強くなれると確信している。

「ワンストップ」という意味では、社が 1986 年に企業理念として掲げた「トータル・コミュニケーション・サービス」は、今なおグループの仕事の根幹を示しているが、現在は当時とは比較にならないほど、仕事の領域が広がっている。経営方針「4.2.2 戦略」で掲げた四つの市場「国内広告市場」「広告周辺市場」「コンテンツ市場」「海外市場」はそれぞれビジネスモデルも収益構造も異なるが、それらを統合するサービスを「ワンストップ」で提供できることが、ますます電通グループの大きな強みとなる。それぞれの組織や専門会社が切磋琢磨し、グループとしての価値創造を最大化する活動を一層盛んにしてほしい。

「ソーシャル」については、電通グループは、様々な業種のクライアント、メディア、生活者、そして株主など社会全体との繋がりを重視しており、社会全体への洞察力、「ソーシャル・インサイト」をとりわけ大切に考えている。私たちの使命は、世の中に「幸せをつくる」「元気をつくる」「平和をつくる」ということである。電通グループは仕事上の責任だけではなく、パブリック・カンパニーとして、そして人間集団として、実に様々な社会的責任を負っており、同時に、すべての電通人は、電通グループとしてのこれまでの実績、社会的評価などを、次世代に引き継ぐ責任も担っている。後輩たちが誇りを持って働けるように、社会から尊敬の念で迎えられる電通グループを皆さんとともに築いていきたい。

電通グループは、広告の枠を超えた真の「コミュニケーション・カンパニー」としての未来に向かって進んでいる。それは、クライアント、メディア、生活者、そして社会全体の未来にコミットし、「価値創造パートナー」として選ばれ続けることで到達できる姿である。

「グローバル」「ワンストップ」「ソーシャル」という三つの種を蒔き続け、次世代の電通グループを育てるのは社員一人ひとりであり、私も新たな種を蒔いていく。

新年にあたり心を新たにし、ともに頑張ろう。